

---

# 茶山ぴよの18きっぷ旅～2006年夏～

茶山ぴよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茶山ぴよの18きつぶ旅（2006年夏）

### 【著者名】

N9087A

### 【作者名】

茶山ぴよ

### 【あらすじ】

私、茶山ぴよが青春18きつぶを使って、まじであれどのない旅  
というものをしてみた4日間のエッセイ。

## 1 出発（着書）

血口禰子つばこのハッセイです。どうもすこません。

# 1 出発

青春18きっぷとは、JRの普通（鈍行）列車を1日乗り放題といつ切符。

夏、冬、春の限定品。

5回（5日）分で11500円。

金はないけど暇はあるという人に打ってつけともいえるが、宿代を考えると逆に高くつくかもしだ。

~~~~~

九州・福岡市から北海道・札幌までまる2日（とっても3枚使つたが）かけて行つたあの夏ももう遠い。

6時に博多駅を出て、鹿児島本線、山陽本線と乗り継ぐ。正午（ひる）に広島に着き、夕方に大阪に着いた。

そして今もある、大垣発の夜行普通列車の窮屈なシートの中で一枚目の有効期限が終了。

4人がけに4人座った状態では、ほとんど寝れず、寝ぼけまなこでほとんど覚えていない東京駅。

2日めは、山手線で上野へ、そして東北本線を北上し、仙台、盛岡へ。

このあたりで、同じよつて18きつぷで北海道を田指す男の子たちと仲良くなつた。

青森に到着し、まだあつた青函連絡船に乗り込んだといひで2枚目の期限が終わる。

北海道の早い朝ぼらけ、九州とは違ひひんやりとした空氣に歓迎されて、函館の港を踏む……。

あれから20年近くの歳月が経つが、私の中ではまだ去年の夏べらいの鮮やかさで記憶に残つている。

あの頃は……廃止が決まつていた青函連絡船があつた。

青森・盛岡間も『青い森鉄道』ではなかつたので18きつぷが使えた。

そんな思い出話を、某編集部で話したら

「さん、鉄オタだつたんですか！」

と驚かれてしまった。

「やだなー。鉄オタなんて。最近は『乗り鉄』つていふんですよー。」

「乗り鉄」？

乗り鉄を知らない彼に、私は稻庭うどんをおいこつてもらいながら、『乗り鉄』とは、

鉄道の車両を撮影するために駅でカメラを構えて虎視眈々と待つた  
りしないし、

車両の『キハ』だとかそういうのにも詳しくなくて、

純粋に『鉄道に乗つて旅するのが好きな人』のことだと説明した。

福岡出身、と同郷の彼は

「そりかへ、乗り鉄かへ」

としきりにメモしていた。おかげで、鉄道特集の仕事を5Pももらえたので、ラッキーだったのだが。

その鉄道特集の取材で乗つたJRの旅がよかつた。

ひさびさに乗つた田舎の鈍行は、手が届きそつなどころに縁、まさに万縁といった風情の中を走つた。

列車と併走するように風がわたつていいくのが、波打つ青田でわかる。  
そして各駅に停車するたびに、むせるような夏草の匂いが乗車してきた。

むせるような人いきれの乗車に慣れた私に、その新しい畠に似た香

りは、急激に思い出を連れて來た。

それは「さあいつふで旅した学生時代の……

山陽本線・柳井近く、きらめきが列車を追つてくるかのような水浅  
黄の海、

東北本線・黒磯近くの祭りのようなヤミの声、函館本線・長万部近くの冷え冷えとした磯の匂い。

「さあいつふで旅がしたいっ！」

一度芽生えた願望は急激に大きく育つて、一気に私の頭蓋骨からはみ出そうになつた。

もともと机上旅が好きな私である。これまで何度も、時刻表を広げて

「ええと、枕崎から稚内まではさあいつふを使うと……」

と妄想旅を繰り広げてきた。こと仕事が立て込んでこのひとときには限つてそれをやりたくなる。

時刻表も地図も読めない友達は、

「よく、そんな細かい数字の羅列読めるよね

と半ばバカにした口調で言い放つたものだが、私はどんな文庫本よりも時刻表を読むのが暇をつぶせる性質だ。

嗚呼、目覚めてしまった、乗り鉄の血！

私は恋する少女のよう、寝ても覚めても18きっぷのことを考えるよりに……なる暇がないのですぐさま行動に移した。

しているわけではないが、30代の恋も似たようなものだろ。即断即決即行動。当たつて砕けろ！

といつても、私の場合、仕事が砕けちゃ困るので、まずは、スケジュールを見る。

ま、フリーライターの仕事なんて、パソコンを持つていけば、ネットさえ使えば、なんとかなるものだ。

といつたら語弊があるが、この期間、取材やたまたま大量の資料と格闘したりする原稿がなかつたのが幸いした。

ゲラとかの類は、『宿泊先に送つてくれれば1時間で返します！』と言つとして、色校は、『編集部に任せます』。これでいい。

福岡での予定を考え、これで4日は確保した。

問題は金だ。だが、飛行機で福岡まで帰ることを考えて、同じ値段程度は使っていい、これは自分へのご褒美だと許した。

ときはハイシーズンなので、東京・福岡の航空券はまともに買づく31600円もかかる。

つまり31600円程度までは、交通費&宿泊費として使っていいと。

かくして私は、南武線・武藏新城駅を出発したのだった。

## 1 出発（後書き）

日々薄れ行く記憶との格闘になると思います。  
メモなど取らずにぼさーっと旅をしていたので、描写など大甘だと  
思います。すいません。

## 2 武藏新城～小淵沢

さてと。

18きっぷは買ったが武藏新城から博多駅までじーやって田舎したものか。

昨日遅くまで仕事をやつけていたので、口クに荷造りもしていい。

どうせ持つていくなら最新版がいいだろ、と時刻表も持つて来ない。

じつこの場合は。

いつも利用する川崎方面と逆に行つてみるに限る。

そういうことで私は、たぶん初めて、立川方面行の南武線に乗った。

座れん……。

くわ。平日なのに、なんで人が多いんだつ！

私はいきなり後悔した。

やつぱり、今書いてる『君は僕の太陽、月のように君次第な僕』に出てくる大磯を通る東海道線を行け、ということだったのだろうか。

私が知ってる18きっぷの旅は、もっと優雅だ。

ボックス席1個を一人で占領して、荷物を枕にして『べ』の字でお昼ね。

これが18きっぷの旅だつちゅーのに、こんな日常丸出しの人いきれ、やめてくれっ！

やめてくれー！やめ……！

3駅ぐらい来て、よつやく前がぼっこと開いた。

ハア。

座つたとたんに疲れが顔を出し、私は爆睡モードに入った。

別に関東平野の鉄道沿線風景に未練はない。

まだまだ寝たいが立川駅到着。きれいででつかい駅だ。

福岡方面は、選択肢はなく中央線に乗り換えるべきだらつ。

おおお、グモツチュイーン で有名なあの中古線。

しかしホームの時刻表で確認してみると、ほとんど関東平野を出ない列車ばかりだ。

まだ18きっぷの風情とはほど遠い、通勤列車がハバを効かせているエリアなのだ。

山梨方面まで接続する列車まで15分も待つことになった。

高尾行き。

ボックス席ではなく、窓を背にした通勤車両がつまらん。色気なし。  
しょーがないのでまた寝る。

寝ぼけていたのであるで記憶がないのだが、高尾で小淵沢行きに乗り換えて、再び爆睡する。

ふと気がつくと、ボックス席に座っていた。

窓の外にはプロシコリーのような山々が折り重なっていた。

よつやく、生活しかない圏、関東平野を抜けたのだ。

ああ、旅情。

天気はいまいちよくない、白い曇り。だから山はよけいにプロシコリーっぽい色に見える。

しばらく、列車旅の風情に浸る。

がたたん、じとじと……がたん、じとん。

いいなあ。列車旅は。むふふ。

幸せになつて、また夢心地になる。

意識がはつきりすると、列車は大月に停車するところだった。

なんでも13分も停車するらしい。

いつたん荷物を持つて、ホームに下りてみる。

なんか乗り換えがあつたらそつちに行つてもいいといつ心積もりだつた。

大月駅の広くない、新しくないホームに下りたとたん

「えー弁当、釜飯、幕の内」

とこづしわがれた、でもよく通る声が耳に飛び込んできた。

見ると、手ぬぐいでほつかむりをした、しわくちゃでひつちやいバ  
アさんがワゴンで弁当を売つていた。

乗客がわらわらとわらく寄つていつている。

そつこや、昼メシ食つてない。

ハツ。

せつかく列車旅つぽくなつてきたのに、ビール飲んでないじやん！

休日といつたら昼からビールでしょう！

私は、麻薬ギレを自覚した中毒患者のよつと鼻息も荒く、

バアさんの後ろにあつたキオスクとロッカーを足して2で割つたよ

うな小さなショッピング入り、ビールを買った。

心のゆとりがいつもの『その他雑酒』ではなく本物のビールを手にとらせる。

「こままでいいですか」

愛想のいい甲府婦人によるシールもビールもなくていいか、との問い合わせ。

「ハイ！」だつてすぐ飲むもーん。

ビールを買ったあとで、ハツと氣がつく。時刻表の最新版買おうよ。

私はまた同じ店に入ってしまった。

ビールをビールに入れてもらえればよかつた……と後悔しながら『私は万引きじゃないんですよ。このビール。今買つたばかりだよね。覚えてるよね……』

といつぱりわざとアピるよつて持ち、時刻表を買つ。

しかし、時刻表も

「こままでいいですか」

と言われ、まったく取り越し苦労だつたようだ。

出ると、バアさんの弁当はわずか4つになつていた。その中からつ

まみとして釜飯850円を買つ。

そして、また元の列車に乗つてすぐに発車した。

動き出した列車の窓を夏の雨が斜めに模様を付けた。あたりの山も緑といつぱり青磁色に近い。

しかしあまり覚えていない。といつのは動き出すなり私は釜飯を開けたからだ。

ビールのまづは動く前にリップに爪を掛けている。

『容器は、一合の「」飯を美味しく炊くことができます』

と包み紙に書いてあつたこの釜飯、贅沢にもホンモノの陶器の釜に入つてこゐるのだ。

どつつで重いと思つた。

具は醤油でつやつやとしたキャラメル色になつた皮が付いた鶏肉、真つ黒ではない蕗の煮付け、シイタケ、竹の子、うずらの卵……

と蓋を開けても色合いが地味なところが、誠実な面構え。

そこに1つだけ黄色く異彩を放つ栗が一粒。

食べてみると、妙に甘くなくさっぱりとしたしょうゆ味、それと固めのくせに味がしつかりついた『飯』にとても好感が持てた。

特に蕗。キャラブキのように黒くない分、蕗っぽい味がかなり残つている。

将じやないが、うずら卵好きの私は、うずら卵と栗を最後まで残す。

メインディッシュがわりにうずらの卵を、デザートがわりに栗をいただく。

栗は色も異彩だったが味も異端で、ご飯のおかずにはならないから、私のようにデザートがわりにするのが模範的な食し方だろう。

しかし、この釜を捨ててしまつのは勿体ないよつと思え、とりあえず元通りに包んで、カバンに入れる。カバンは時刻表と釜で一氣に重たくなつた。

腹も満たされた。そしてビールでほろ酔いだ。

車窓にはぶどう棚がたびたび登場している。甲府盆地だ。

しかし、一つのことでも満足すると、次に一つ心配事が出てきた。それは

- - 今日の宿、どうするかな。

ということだった。

まだ、仕事が一つあった。それに、『君は僕の太陽……』の今日の

更新分もまだ書いてない。

と、いひことは。

絶対にネット環境が整った宿でないとマズイということだ。

私は、携帯を取り出すと、検索をし始めた。

しかし……検索といひのは、目的地が決まってないととても探しにくいものだ、ということを始めて知った。

時刻表の路線図も広げる。

4日間で九州まで行くには、どこまで行けば安心できるか。

いや、まずはネット環境が整ったホテルを探すのが先決だ。

今乗っている列車は小淵沢まで。そのあとは長野行きに接続する。

敗北した田中県知事のくじくじとした田を憲こ出す。

なんとなく長野。いや、九州を目指すのに長野は行きすぎだらう。

中央線を名古屋方面に行くのが王道だらうが、途中に適当な町は…  
…知らない。

ビジホがありそうな町といったら、沿線では松本しか思いつかない。

松本でとりあえず検索してみる。

しかし。携帯の小さな画面で探しているせいか、『お客様の声』の苦情のところばかりが気になってしまい、どれも泊まりたくないなつてしまつた。

いつぞ、松本から高速バスに乗り換え、高山に行くか。3000円も出してしかも到着は遅いのか……むづ。

あれこれ案が飛び出しては消えていく。

うだうだと携帯の画面と、時刻表を行き来していくうちに列車は小淵沢に着いてしまつた。

小淵沢では次の列車がくるまで40分以上の待ち時間があつた。

ホームで降りた人は皆、そのまま同じ列車を待つていていた。新宿方面の列車を待つ人も加わり、小さな駅のホームはしばし人でごったがえした。

ようやく、新宿方面の列車が行つてしまい、ベンチに腰掛けることができた。

また、携帯を取り出して、今夜の宿を探しだす。

気がつくと風がとても涼しい。東京とはまるで違う、高原の風。

子供の頃登つた、久住山の涼しさを思い出した。

この涼しさだけで、小淵沢つていいところだな。と思わせる爽快冷涼な風だった。

方針を変えて、今まで泊まつたことのあるホテルのローンをいくつか検索した。

すると、上諏訪に駅徒歩5分で、ネット環境がよいホテルを見つけてた。

上諏訪って知らないけど、と路線図を見ると、小淵沢から6駅めだ。せっかく早めに着くならと、私は上諏訪で降りて、実物の外観を見てから、携帯サイトで予約を入れることにした。

汚かつたり遠かつたりしたら、また電車に乗つて移動すればよい。という考え方だ。

なお、サイトから予約すると、朝食が無料でつくるから、これはぜひ付けたい。

ようやくメドがついて、ほっとしたのも束の間、見ると携帯の電池が少なくなっている！

ヤバイっ！

私は、残り少ない電池を温存するために急遽携帯の電源を切った。

携帯の電池問題は、この旅の道中、私をずっと悩ませるのである……

⋮。

グモツチュイーン＝人身事故の2ちゃん語

### 3 小淵沢～上諏訪（前書き）

エロ話があります。お嫌いな人は読まないほうがいいと思います。

### 3 小淵沢～上諏訪

ほどなく上諏訪に着いた。

ああ、そうか。上諏訪温泉なのだな、と初めて気付く。

上諏訪駅にはタリーズ・コーヒーが入つていて思わずそつちでゅっくつしたくなるが、宿泊マップをもらい、田舎の宿を田指す。

小淵沢と違つて、じつはなんだか暑い。

旅先の暑さつて本当にウザい。なぜなら洗濯物が増えし、歩き回るものおっしゃになつてしまつ。

線路を渡つて駅の反対側に出ると田舎でのホテルは簡単に見つかつた。

まだ離れてるけど、まあ、キレイみたいだしいか、と道端の縁石に座り込んで、携帯サイトから予約を入れる。

アスファルトの熱が尻からじわじわとくる。

さすがにサイトから予約を入れてすぐにチヨックインするのもなんだし、と場所だけ確かめるために近くまでいく。

すると、ホテルの田の前には、なんだか瀟洒な古い建物がある。

これも宿かしらん?とのぞき込む。

『斤倉館』と書いてあつ、『ひやせり田嶋り温泉施設のよつだ』。

シルク王の斤倉さんといつ人が女工さんのために建てた厚生施設だとか。

現代の建物に比べると、ずいぶん贅沢に見える。

女工といえば、思い出すのは『ああ野麦峠』。

テレビでそれを見たのはまだ小学生の時だつたが、遊ばれて孕ませた女工さんが、熊笹の中で出産するから『野産み峠』だ……といふくだりがすぐ印象に残つている。

温泉に入つてもいいが、まだ荷物も置いてないしなあ、と見渡すと、建物の向こうが開けている。

道路を渡つて、行つてみるとそこはやはり諏訪湖だった。

夏の終わり、まもなく夕暮れの諏訪湖の湖面は鈍色の空を映してた  
だ静かだった。

湖畔には誰もいなく、白鳥の形の遊覧船がもう営業を終えたのかぽ  
つんと向いつの岸に羽を休めていた。

予約を入れて30分ぐらじしか経つてないのに、フロントはこゝや  
かに迎えてくれた。

さすが、自社サイトである。

しかも、さすが温泉地にあるビジホ、1階には温泉があるやん！ヤツタ。

とつとと仕事しちゃつて温泉に入らうつとー。

と嬉々として部屋へ。

で、わざわざ仕事すれば、まだ私も感心したものだが……。

こうこうホテルで私が手に取るのはテレビの上にある…… そう有料放送の案内である。

おお、これもあるわあるわ。エッチな放送の案内が。

男性諸氏には珍しくもないだろうが、女子としては大変に興味深いんですね。

断言するけど、女子がビジホに泊まつたら10人中7人が有料放送を見るね。うん。

さすがに、ビデオショップでHロビーテオは借りないけど、ビジホで有料放送は見る。

それぞ女子の実態なり。

まあ、案内だけ見て、いまいちストーリーなどが書いてなくて面白くないので、そそくさと仕事にかかる…… らないんですね。

一回部屋を出てビールを買っちゃう。

で、ビールを飲みながら、よしやくパソコンのスイッチを入れる。仕事はあとまわしにして、先に『君は僕の太陽……』を書き始める。今後のスケジュールのことを考えると、今田のつがい4話ほど書いてしまいたい。

まずは今日の分は最低限。

同棲を始める将と聰のちょっとセクシーな場面をビールを飲みながら書く。

が、どこまでわかるかでつまづく。

まだ先が長いんだよなあ……でもこないだ乳まで揉ませてるしなあと頭を抱える。

いつぞ全部をせて……いやいや、そうしたら後の説得力が……。

と、ものすじぐ、ものすじく考える。とか、将ばっかり『する』方だよな。と思いつく。

いや、実際、セックスって最初のうちは、全部男任せだよな。

でも実際17歳と26歳の付き合いでだったら、男ばつかがリードして、女がちょっと活きのいいマグロ程度つてのも、ちょっと女が怠慢ジャマイカ？

と新しい発想が浮かび……お、小説用設定カレンダー見たら、ちょうど聰生理じやん、と結局あんなことを見せてしまった。

あーあ。純情な読者には「メン」と謝りとべ。

とつあえず2話分書いたところで、腹が減ったことに気付いた。

とりあえず1-1-1話だけ投稿して、外に出てみる。

フロントにあつたフリーぺーパーにあつた『黒うどん』とやらを食べにいったやうと思つ。

上諏訪温泉でも旅館が集中している通りにそれを出す店があつた。

いざれいな居酒屋っぽいけど、客は少ない。

金曜なのに、経営は大丈夫なのかな。とも思つたが女一人の身としては客は少ないほうがありがたい。

カウンターに座り、生ビールと味噌煮込み黒うどん、とこうのをオーダーする。

全粒粉を練つたために黒っぽいうどん、が黒うどんの正体で、別に諏訪湖特産の淡水イカの墨を練りこんだ……とかそういうのではない。

(あ。ギャグですよ。諏訪湖には淡水イカなんか、たぶんないです)

凍ったジョッキで出てきた生ビールが個人的には嬉しい、10分ほど待たされて節分豆を入れる枠のバカでかいやつの中に土鍋がはまつて黒うどんがグツグツとお出まし。

生卵が入っている。さうして半熟にしたいので土鍋のフタを閉めて2～3分待つ。

よし。

おもむろに土鍋のふたをあける。しゃらん、ふわん、と湯気があがり、いい感じに半熟になつた卵さんが赤みそダシ汁とネギ、そして絡み合ひうどんたちの中にいた。

わーい。いただきまーす！

肝心の黒うどんは味噌ダシにまみれていって、どこが黒なのかよく分からぬ状態だったが、太目の麺はコシがあつて悪くない。

わりと美味しい。赤味噌うどんとは、東京でも九州でも食べられないうだ。

お通し300円が付かなければさらに満足だったのだが、まあよしとする。

ホロ酔いで宿に戻つたら……そつだー、まだ仕事があった……。愕然とする。

比較的好きなことを書いていい仕事なのだが、仕事になるとどうじつてこんなに書けないんだろう。

悶絶する」と2時間あまり。

途中でも「みちの『レガッタ』が始まる。

も「みちには悪いが、話はまつたく見てない。

でも「もし」がやつぱりイケメンなのと、音楽がいいので、仕事をしながら見るのにちょうどいいドラマだ。

そういうしながら800円の原稿をなんとかまとめる。

腹いせに、と言い訳しつつ、ソリでついに有料放送を見ることを決意。

幸い、テレビカード販売機は部屋のすぐ斜め前。しかしそこはエレベーターの前でもある。

私はまるで犯罪者のようなスリルを味わいながらテレビカード販売機の前に立つた。

エレベーターの位置を確認する。ヨシ。1階について動く気配なし。

左右の廊下を確認する。ヨシ。密が出てくる気配なし。

慎重に慎重を重ねて、おもむろに1000円札を入れる……。

カツシャン。

ビクッ！

思いがけない音にあわててあたりを見回す。

どつかのドアが開いたのではないか、と思つたら実は機械が100円を受け付けた音だけだった。

ふつへ。

そんなフェイントに3秒ほど時間無駄にした。気付くとカードが出てきている。

これを見られたら大変だつ！

ドキンドキンしながらカードを素早く抜き取ると、何食わぬ顔をして部屋に戻る。

今日4本目のビールを片手に、有料をオンにする。

……しかし。別にこれをオカズに、なんかするつてわけでもない。

純粹に鑑賞してしまつた。

まあ、将と聴のセックスを書くことになるので、その参考、といつ氣分もなきにしにもあらず。

巨乳の動きとか、自分が持つてないからわかんないしね。

が、あまり参考にならなくてがっかりした。

女があんまり動かないのだ。このマグローと叫びたくなつた。

いや、動いてるけど……単に男に動かされてるだけ。

本物の魚のマグロでも棒でつつつかれれば似たような動きをするに違いない。

声だけは盛大に出してるけど、違う。こんなんじゃない。

しかも『家庭教師ナントカ』とかいうタイトルなのに、なんで男優がオッサンなんじゃーつ！

(ビーハヤリ国家試験を田指しているという設定らしいが)

別チャンネルでは、女がニヤニヤと笑いながら2人の男にSMの縛縛をされ、三角木馬に乗せられている。

どうせだったら泣き喚いてくれ。

こんなんだつたらSMバーにでもいったほうがもっとエグイものが見られる。

私はとても腹が立つて、ついにカードの大半を残したまま、一般放送に戻した。

しかし。

ああいうビデオにでてくる女優さんはみんな、本当にキレイな体をしている、と思つ。

特にチチとかでつかいしな。でも現実の女性で、あそこまでキレイな体の人ってなかなかない。

私は温泉が趣味で、よく入りにいくのだが、あんな体の人いたら、女湯でもバリバリ目立つて、皆横目でチラチラ見てしまうに違いない。

ああいうのをバーチャルで見慣れていて、現実の女性に幻滅したりすぐ飽きたりする男性っていうそだからコワい。

あ、でも女のほうもイケメン慣れしちゃってるから五分五分? ははは。

ちなみに、戻った一般放送では、『黒い太陽』をやっていた。

有料放送より一歩引いて出てくる、酒井若菜のほうがよっぽどエロイように思った。

これが終わってやっと上諏訪の湯に憩うことができた、夜半なり。

#### 4 上諏訪→松本→奈良井

上諏訪のビジホの温泉は意外に泉質がよかつた。

ぬるぬる系で乾燥肌に優しい系。

気をよくして、寝坊の私には珍しく、少し早く起きて朝風呂も堪能した。

ちなみに女風呂はフロントで鍵をもらわないと入れないシステムになっていた。

きっと不祥事が起きたせいなんだろ? なあ、と想像する。

「間違えましたあ」とかいつて、ずうずうしく女湯を覗くオヤジとか多そうだもんなあ……（笑）

朝食つきなので、バイキングながらしつかり食つ。

しかしだ、私はこの朝食バイキングが嫌い。

はからずも今変換し損ねて『黴菌ぐ』とかになつた（笑）けど不潔な感じだから嫌なのだ。

特に、でつかい炊飯器の横に、濁つてふやけた飯粒が浮遊する水中につかっているしゃもじ。あれがキタナイ。

しゃもじ自身にも、すでに取れなくなつたふやけた飯粒が、こびりついていたりして、あれでご飯をよそうのにとても抵抗がある。

あのしゃもじが浸かっているごはん汁って、温かい炊飯器と何度も往復してるわけじゃないですか。

つまり、あのごはん汁の温度ついて30度ぐらいになつてると熱いんですね。

てことは、バイキンの繁殖にかなり適温だよなー、とか、いらん想像をしてプルプル震える。

あと味噌汁も長時間の加熱で溶けたようなワカメが浮遊してるもの嫌だし、

もしかしたら、むきだしのおかず類の前で、オヤジが「へーっくしょん！」とかやついたら、と思つビジッとする。

私が好きな温泉宿で、たつた8室なのに朝食バイキングをやっている宿がある。

「こは、ご飯や味噌汁、焼き魚といったものは個別に運んでくれて、煮物やサラダだけをバイキングにしている。

『ヘックション問題』にしても、朝食時間は固定なので、皆が見守る中、バイキングの真上でのヘックションはしくらいマードがある。

実際やつてる人間も見たことがない。

ま、こは安いビジホだからしょーがないんだろ? けどさ。

べつだん、メニュー的にも特筆すべきものはない、単なる腹ふたぎ

的な朝食であった。

チェックアウトをして上諏訪駅へ向かつ。今日も暑い。

今田は何処へ行くか。何も決めていない。

結局小説あまり書きすすめなかつたので、今日も願わくば、ネットがつかえるところがいいなあ、と思いつつ、上諏訪から列車に乗るなり寝てしまった。

氣付くと終着、松本である。工事中だつたがまあまあ大きな駅だ。

松本、かあ。『白線流し』ぐらいしかイメージがないので、駅で情報収集する。

どうやら、ソバがうまいらしいのと（そうだ、信州だもんね）、松本城がホンモノらしい、というのがわかつた。

とりあえず、白壁の建物が並ぶ通りにでもいつてみよう、と思つて100円バスを待つ。

松本は上諏訪と違つてけつこう涼しかつた。

が、待てど暮らせど来ない。

おつかしーなあ、と見た時刻表に張り紙発見。

なんかイベントがあるので、午前中は運休するとのこと。

ええーっ！

んもう！

ショーガないので、歩くことにする。歩くと結構都会の松本、アスファルトの照り返しでかなり熱い。

歩いていくうちに、そのイベントにでつくわした。

子供たちの鼓笛隊パレードが車道を占領してやつてきた。そして沿道でそれを見守る親兄弟親族一同らしき人々。

あつという間に人・人・人でごったがえしてきた。おまけに大音量のマーチ。

人波をかいくぐりながら、松本に来たことを後悔する。

私が会いたかったのは、しつとりした風情であつて、賑やかさではない。

ああ～っ、ウザっ！

私のイラダチとまづらはりに、イベントはますます盛り上がりを見せていた。

というより私が盛り上がっている方向へ進んでしまっていたのだが。

しかも、太陽までカンカンに照ってきた。

地元民謡での地元民族衣装をつけての踊りとかなら、ヨソ者が見てても楽しめるのだが

私が出つくわしたイベントは残念ながら、まさに

オブ・ザ・ジモティ バイ・ザ・ジモティ フォー・ザ・ジモティ のイベントで、地元の人人がイキイキと楽しそうに群れる中、体を力一にして通りをいくヨソ者の私はなんだか物哀しかった。

ふてくされて腹が減つた私は、ガイドに載っていた蕎麦店の一つに足を運ぶ。

自家栽培の蕎麦に無農薬野菜の天ぷらという「ペリー」にひかれての来店だが、

値段のわりにはソバがいまいちだった。

夏のソバは一番不味い、というのをはからずも検証する結果になり、

私はますますぶしつらで松本城へ行ってみた。

あいかわらず人は多いが、ここまで來たら意地である。

入場券売り場で、

「松本城の単品入場券はないんですよ」

といわれ、さらに腹が立つ。博物館とのセット入場券しかないという。

たかだか300円アップであるが、必要のないものの分の金を払うとなると腹立たしい。

が、「せっかくここまで来たんだし」と不承不承金を払う。

考えてみれば、私はこの「せっかくここまで来たんだし」に、今までの人生でいくら無駄な金を払ったことだろうか。

(ちなみに、城のあとで、いつてみた博物館であるが、殺風景で本当にイマイチ、本当に松本城とセットにしないと客が呼べそうにない哀れさだった)

そういうしてやっと入った松本城は、子供鼓笛隊に占拠されていて、ものすごいことになっていた。

入場券売り場はそれほどでもなかつたのに騙された！

本当に前に進めないほどの人、人、人。芝生の上まで人だらけである。

人ごみ大嫌いのあまり、里の祭、博多どんたくも避けてきた私は、死ぬほど、チケットを買ったことを後悔した。

玉砂利の通路が人だらけなので、それをふしぎる石の上を飛ぶようにしてようやく天守閣入り口にたどりつく。

なんとか、松本城に入城したときには疲れ果ててしまった。

松本城は、明治維新の廢藩置県の際にも取り壊されなかつた、という意味でホンモノの城である。

主は、誰というのが思い出せないほど、口口口口変わつてゐる。

確か、唐津の小笠原とか、松江の松平（私は不昧公のファン。そういや松江も古くから蕎麦の町だけど、松本にインスピライアされたのかな？）ともいた気がする。つる覚えだけ。

さてクツを脱いであがる、ホンモノの城内部は、正午になると関わらず、かなり薄暗かつた。

……とにかくとは、時代劇などでおなじみの、殿様を囲んで家来が集合するシーンなどは、

当時は電灯もないことだし、そういう暗がりで行われていた、といふことになるんだな、と想像する。

幾層にもなつた城内部の最後は、月見櫓である。

松本城の特徴として月見櫓が天守閣にくつついた珍しいつくりが挙げられるが、いじはなるほど他のに比べると少し明るい。

しつくい壁に切り取られた窓は、涼しい高原の風を招きいれながら、安曇野の山々を遙かにのぞむ。

ちょうど、私が風に誘われて、窓に近寄ったときだ。

「あれれ 追いし かの山へ

まるで風の音のような、透き通ったハーモニーが流れてきた。

見ると、芝生の上にいるパーカス隊が、アカペラで歌っているのだ。

まるで、効果音のようなタイミングだった。

城の窓から見る、遙かに縁かすむ安曇野の山。遠く近くに蝉時雨。

『ふるさと』のパーカスはそれら夏の終わりの風景に、思わず涙ぐみたくなるほど似合っていた。

観光客の私には迷惑なイベントだったが、それだけは素晴らしかつたので、私は全てを許した。

私が好きな街に飛騨の高山がある。

松本駅に戻った私は、電車を待ちながら、今日の宿を考えた。

時刻表を見ると、遅くはないしそうだが、今日中にそこにたどりつくのは可能そうだ。

高山に行くのを大前提として、携帯で宿を検索する。

するとリニューアルしたての部屋が4300円で泊まれるプランを見つけ、小躍りして即座にそれに決める。

そこまでホームですべて手続きをしてしまい、中央西線方面の普通列車で松本をあとにした。

乗り継ぎで時間が無駄にあきそつなので、奈良井宿で途中下車予定だ。

幸い、ボックス席を一人で占領することができた。

途中、面白い人が斜め向かいに座った。

紺袴に羽織と、明治時代の『書生』スタイルなのだ。クツは革靴だつたけど。

じろじろ見たら失礼だな、とは思つたが、どうしても目が行つてしまふ。

ぼさぼさの黒髪に、色白、神経質そうな細目というのもいかにも『文士崩れ』という感じだ。

このヒトがどこで降りるのか、とても興味深かつたので、中央西線がどのへんから縁に囲まれだしたのか覚えていない。

気付くと、線路の両側を濃い緑が覆っていた。

まもなく奈良井に到着した。書生の行く先は気になつたが、奈良井で降りる。

時刻表を見ると、たつた1時間しか観光時間はないが、奈良井宿の町並みは駅からすぐ始まつていた。

なるほど、一げ茶色を基調とした宿場町の町並みがよく保存されている。

アスファルトでさえなれば、タイムスリップしたようだ。

それにしても暑い。なんでこんな日なたばかり歩かされているんだろうか……。

ん？ 日陰は？

宿場町のメインストリートの端、ひょうひざくべのに氣持ちのいい日陰のあたりが工事中であることに、今じる氣付いた。

しかもアスファルトを切り取る、バリバリといづドリルの音が、かなりウルさい。

それまでは、ゆかしい町並みに氣をとられて、氣付いてなかつたのだ。

なにも、土曜日に工事することないと思つんだが、バカだなー。

と少し腹が立つ。暑いとすぐに腹が立つのがいけない。

とそこへ、街の一角に、湧き水発見。気持ちよさそうにスイカが浮

いている。

ちょうど空になつたペットボトルに水を補給するが、その冷たさは、ボトルの外側が瞬時に曇るほどであった。

暑さにまといつていた私は、ペットボトルにいつたん汲んだ水を、ノースリーブの肩から腕にかけた。

た、たまらん。

あまりの気持ちよさに、私は何度も自分の腕に冷水をかけまくつた。ノースリーブの若い女（私のことだよw）が水とたわむれだしたので、

通行人のジジババが、皆湧き水に一コ二コと寄ってきて、我も我もと水を汲みはじめた。

美人は目立つて困るな、フツ。

つて、『美人』がこんなところで、ぼーっと一人旅してゐわけナイダローッ（笑）

とひとり、ボケと突つ込みを入れるのも一人旅の喜怒哀楽なり。

## 5 奈良井～多治見

1時間しかないのと、口クに茶もできず、奈良井をあとにする。

結局名物が何かもわからなかつた（ショボーン）。

大学時代にゼミ旅行でいつた妻籠も似たような、こげ茶色を基調とした宿場町だったと思うが、

あつむは栗きんとんがバカみたいに美味しくて、ゼミ友達と争つようになつたのを覚えている。

これはゼミ友と再会するたびに出でてくる話題ベスト10に入る。

「うづ。栗きんとん、食べたいなあ。ちなみに正円のおせちみたいなねつとり系じやなくて、

「栗をそのままぐずして固めました」みたいな素朴な栗の味。すっかり酒党になつたいまも懐かしく、思い出せば食いたい。

それはやつと、再び中央西線の鈍行にのりこむ。

あまり深く考えずに空いてる席、空いてる席と歩いて、男性一人で座っているボックス席に会釈して斜め向かいに座つた。

奈良井を出た列車は再び、中仙道ぞいの緑濃い沿線を行く。

私は、今日何時に高山につけるかなあと、分厚い時刻表を出して確認した。

土曜の今日は『チャングムの誓い』があるのでこれは見逃したくな  
い。

もし特急1区間とかで時間を効率化できるなら、それをやつてもいい、と熱心に時刻表を追う。

……と

分厚い時刻表を見る私に注がれる熱い視線。

ハツ。

斜め向かいに座っていた男性が私を見ている。

気付いたとたんに、

「あの、18きっぷで旅行されているんですか」

と話し掛けてきた。思い切って話し掛けた感じだが、おずおずとした感じだ。

「ハア」

私が気乗りのしない返事をしたのは、ひとえにその男性の容貌が冴えないのがひとつでわかつたからだった（すまんっー）。

「長時間の列車旅は疲れるでしょう」

なんだか地声なのにファルセットのような声に似合つて、

若いんだか、年をとっているんだか、もともと広いオーティなのか、それが後退したものなのか、判別しかねた。

泣きそうなかんじの田せりゅうと子泣きジジイを思い出した。

「ふーえ、べつにー」

そんな私の回答に仲間を得たりと思つたのか、

「じいまで行くんですか?」

と訊いてきた。

「じいのまま、ついてきたらヤダナー。まさかね。

と用心した私は、

「ええと。九州方面まで」

ところがあつ嘘ではないに答えをこつこつした。すると

「僕も、九州までなんですよ」

とちつこつ田を輝かせた。

「僕、電車好きなんですよね」

「ハア」

「ショットウに乗るんですよ」

「ハア そうですか」

「イベントにも行くんですよ」

と嬉しそうに彼は傍らの紙袋からはみだしていた行き先プレートを指し示した。鉄オタだということははっきりわかった。

「ハア……すゞースね」

私は、ハア、ハアと文面だけ見たら、激しく萌える男性か、相撲取りのインタビューみたいな返事をしながら、

悪いけど『空気読んでくれえ～』と心で叫んでいた。

ちなみに、『空気嫁』というのは、ふだん私の嫌いな言葉ワースト5に入る単語である。

「空気なんて読んだら口クなことないって！ストレスばっかたまつちやつてさ～」

と他人には豪語しているわたくしである。

しかし、それをいま、じいじから欲している、自分勝手な自分なのである。

『スマソ（ 2ちゃん古語）。私は君のエルメス（ 自意識過剰）にはなれないんだ。だから空気嫁～～』

と心で絶叫しているわたくし。

と、そのとき救いの神が現れた。

途中の駅で乗ってきた地元人らしいオバチャンである。

派手な顔立ちのオバチャンは太めの体を私の前に座らせた。

ふだんだつたら、

「ちつ、足置き場が狭くなるぜ」

とハタメイワクな場所であるが、鉄オタくんに辟易している私には女神である。

私は、鉄オタが沈黙した一瞬の隙を狙つて、携帯にイヤホンを差し込んだ。

CDからダウンロードしておいた、『小田さんびくし』が耳に流れ る。

イヤホンしてれば話しつけられないだろう。と思いつきや。

鉄オタめ、イヤホンをはずさせてまで、いろいろ話しつけてくる。

おかげで、ジャストシーズンの『秋の気配』が中断されてしまつた。

私へのインタビューは終つたのか、こんどは自分語りをはじめ つた。面白い。エンタメ性ゼロ。オチもない。

私は思い切り興味なさうに相槌を打つたのだが、おかまいなしである。

「あー、もしかして多治見までずっと一緒になのかなあ。

そう思ふと少々げんなりした。

イヤホンだけでなく携帯本体をいじくるふりを始めて防御を試みる。

特にみるメールもないのに、暇潰しに『小説家になろう』を開く。

タダで小説を読めるのは素晴らしい。山の中だといつに携帯の電波が届くのも素晴らしい。

時間はたっぷりあったので、久しぶりに私が大好きな小説である森本エリさんの『水色』を最初から通しで読む。

さすがに、こちらが携帯に集中し始めると、しつこに話し掛けのをあきらめて、鉄オタはオバチャンに話し掛けはじめた。

オバちゃんは、いきなり話し掛けられてびっくりしたようだったがさすがジモティ、心が広い。

満面の笑みというわけではないが、笑み10%ぐらいを浮かべて、相手をしてあげている。

私はそれを見て、少し自分の狭量さに少々血口嫌悪した。

少々、自分語りが過ぎる鉄オタだけど、そこまで無碍にすることもなかつたのではないか。

と後悔する。

それにもしても、出会いはともかく、あまり積極的にコマース一ケートしたくないな、と思う理由は、

情けないがこのトシになつても『見た目』なのである。

それをまのあたりにして自分の成長してなさにがっかりする。

もし、これが。

速水もこみちそつくりの鉄オタだつたら。

赤西仁(せつぐり)の鉄オタだつたら。

筒井道隆(いきなり傾向違つて?でも好きなんだもん)そつくりの鉄オタだつたら。

と想像をしてみる。

『どこのまで行くんですか?』

「えっとお、高山本線の高山駅です。そぢはまぢまぢまぢ~?」

『僕も、九州までなんですよ』

「え~、ホントオーラフー。どうこうルートでいくんですかあ

？」

『僕、電車好きなんですね』

「さやー、あたしも！あたしも乗り鉄なんですうー。私、博多から札幌まで一�きつぶで行ったことがあるんですよおー」

と、声はさつきのよつなドスの効いた『姐』のような声ではなく、  
1オクターブ高く、

すべての語尾にハートマークをつけて訊かれてもない」とまでベラ  
ベラとしゃべっていたに違いない。

うん、違いない。

結局、面食いなんだなあー、ハア。

通路側にこいつそりとため息をついた私は、通路の先に、さつきの袴  
姿の書生が立っているのを発見した。

……ウソ。

私が奈良井で降りた後、書生さんもどこかで降りて、再びこの列車  
に乗ってきたようなのだ。

書生さんは、袴姿でドアの近くに佇んで、窓の外をじっと見つめて  
いた。

その視線の先をみて、通り雨が、いま降つてゐることに気付いた。

山も遠ざかって、雨の中青田が揺れていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9087a/>

茶山ぴよの18きっぷ旅～2006年夏～

2010年10月12日18時31分発行